との協調下に推進された。

(2) 中国のどちらの政権を援助するかに不拘、その目的は中国から一つの巨大な権益を攫取することにあった。

(3) 中国の封建反動勢力(例えば清朝政府、或いは袁世凱)を掌握し、それと日本軍部を結んで一体とし、その傀儡としようと企図した。

(4) 日本の民間団体、或は一般浪人の革命党に対する態度は、それぞれ異なっていたが、彼らの大多数はすべて革命党を利用しようと考えていた。

(5) まじめに革命党を支援、或は同情する日本の友人もないわけではなかったが、その数はきわめて限られたものであった。

以上の十篇の論文は、いずれも丹念な実証的論文であり、具体的な事実関係の解明に充分な成果を挙げているといえよう。具体的な史料としても、中国側史料は勿論、『日本外交文書』などもよく利用している。但し、些か気になる点は、彭氏の論じているテーマは、わが国の研究者も関心を持っている問題で、相当数の論稿があるにも不拘、彭氏はほとんど日本の論文を参照していない、と思われる点である。或は参照されても、註記を省かれたのかも知れないが。この点は、前者の『中国の近代化と明治維新』についても言えることである。筆者は、彭氏が日本人の研究論文にもそれ相当の評価を与えられることを期待したい。

次に、彭氏は康・梁ら変法維新派に対して、かなり強い親近感を抱いているのでないかという印象が持たれる。この事は、前著についても同様である。なぜ、台湾もしくは台湾系の近代史研究者が、このように変法維新派に対して共感めいたものを抱かれるのか、その理由を知りたいものである。

孫文については、本書中ではすべて「中山先生」と記され、必ず「中」の上の一画を空白にしている。これは彭氏の孫文に対する尊敬の感情を現わした結果であろうが、この様な表現形式は封建王朝時代の慣行である。著者が歴史家として、現在にあってこの様な表現形式を採用されるのは、どのような意図に基づくものであろうか。筆者には理解できないところである。(中華民国六七年一二月、芸文印書館、A5判、四七二、三六頁)

(フランス) 国立図書館

国立図書館(ペリオ蒐集敦煌)チベット語文献抄

山口瑞鳳

今世紀はじめに近く甘粛省敦煌で発見されたいわゆる敦煌

文献は東洋学の研究一般に大きい影響をもたらした。その敦煌文献のうちの大部分は漢文文献で占められるのに対し、漢文文献の何分の一かの量がチベット語文献であるにすぎない。敦煌の長い歴史のうちでチベット人がこの地に君臨したのは七八六年から八四三年の王朝分裂後しばらくの間までの短期間に過ぎなかったからである。

大部分を占める漢文文献の研究がこれまでの漢人文化の研究に大きな貢献をしたことは否めないにしても、これまでの研究成果を大きく覆すとか、研究の意義さえも変えてしまうものではなかった。これに対してチベット語文献の方は、これまでのチベット研究に全く与えられていなかった価値をもたらした。

チベット人は七世紀前半に固有の文字をもって自らの事情を記録していた。中国の周辺にあって古くから強烈な影響を受けながら漢字を用いないでいたこと自体が稀な例に属していた。今日のチベット人は尨大な量の文献を保有している。その大部分は仏教に関連するものであるが、彼等の文化一般に関する伝承も決して少くない。しかし、これらの文献については二つの欠陥とも云える特徴が指摘される。一つはすべて仏教の立場から編纂され、長い間に書き変えられていることと九世紀後半から十一世紀前半にわたる混乱と空白の時代があって、伝統の大部分が一旦中断されていることである。伝統の中断を修復する過程において、仏教の立場による改変が行われたことは研究者の立場から見れば、最も不都合なことであった。つまり、後代のチベット語文献から古代チベット、吐蕃王国時代の真の事情を探り出すことは至難の業であり、決定的な限界があった。

敦煌チベット語文献はこれらの事情を根底から変えてしまった。これらは、八世紀末以後から九世紀前半にかけて吐蕃本土から持ちこまれた写本や敦煌とその周辺に成立した著作、訳書、文書の写しまたは本文で構成されていて、発見されるまでほぼ九世紀間にわたって手が加えられていなかったからである。

我々は、今日のチベット語文献のもっている二つの欠陥を全く含まぬ文献に接し、九世紀前半までのチベット人が自ら述べた彼等の歴史、彼等の文化に接しえただけでなく、これらによって今日伝えられる尨大な文献のうちからも真相を取り出す手がかりを与えられたのである。敦煌チベット語文献がなければ、たわ言を綴った尨大な紙片の山に過ぎなかったものが大切な研究素材として悉く生き返ったと云っても過言でないであろう。

敦煌チベット語文献がなければ、例えば、チベットの古代史研究はチベット仏教史の冒頭を探る以上の意味は持ちえなかった。しかし、事情が変って吐蕃王国の成立過程を辿るこ

とまで許されるに至った。中国人の伝える少からぬ量の情報を古代のチベット人の主張と較べて吟味することまで可能になったからである。即ち、中国語史料も活きかえったのである。これは一例である。

これらの敦煌チベット語文献はペリオ蒐集分がパリに、スタイン蒐集分がロンドンに保存されていた。従来、後者については東洋文庫で写真を見る便宜はあったが、前者については目録を参照して必要な文献をかなりの手数をかけて写真で入手するという状態であった。ところが、今日、ペリオ蒐集分の主要なものについて優れた写真複製の技術によった Choix de Documents Tibétains Conservés à la Bibliothèque Nationale. が出版され、しかも、一部写本についてスタイン蒐集分からの補足をつけて示された。

これら敦煌チベット語文献をめぐる事情については R.A. Stein 教授が序文の (pp. 5-8) 中でこれを簡潔正確に示している。

文献の選択は R.A. Stein 教授と Ariane Macdonald, Anne-Marie Blondeau 両教授によってなされた。評者の知る限りでは、二巻にまとめるのにこれ以上何も求めるものがないと云うべき周到な選択である。従って、この複製本によって直ちに望むところの研究が始められる。故 Marcelle Lalou 教授の三巻の目録を併せて不足の文献を随時求めれば足るからである。

Marie-Rose Séguy 女史による前文 (pp. 9-14) には漢文文献を含むチベット語文献、表裏になって漢文、チベット語が書かれているもの等の一覧表が示されている他、ラルー目録に見えないがチベット語を含むという文献も指摘されている。また、チベット語、漢文にコータン語、もしくはウィグル語を併せた文献の番号も示されている。

第一分冊では Pelliot tib. 990 までが、第二分冊では 992 以後が収められ、仏教関係の文献は第一分冊に殆んど尽されている。第一分冊には India Office 751 と 737 が併せ収められている。前者では、従来の乱丁を匡し、f. 27 がしかるべき位置に収められて首尾整ったものになっている。後者は Rāmāyaṇa に関するものである。これについては、この出版に最も努力を注いだ我が国出身の優れたチベット学者今枝由郎氏の調査にもとづく注記があり、J.W. de Jong 氏の研究も含めて必要な記述が尽されている。第二分冊には J. Bacot, Ch. Toussaint, F.W. Thomas による有名な *Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet*, Paris 1940 にかつて収められた文献が India Office や British Museum からも集められているのは云うまでもない。その他では F.W. Thomas が紹介し、我が国でも藤枝晃氏が「吐

蕃支配期の敦煌」で扱った四〇人一隊の編成表、即ち、India Office Ch. 73, XV, fragment 12 が収められる筈である。これについては他に G. Uray 氏の研究もある (Notes on a Tibetan military document from Tun huang, AOH, XII, 1-3, 1961)。

両分冊に収められたものについては、Macdonald 今枝両氏によって美術、歴史、言語、文学、宗教、科学技術、社会と分類して関連文献の番号が記載され、内容が二つ以上の分野にわたるものは重複して示されている。この分類は、ラルー目録の上に更に調査が重ねられたもので、評者の知る限りでは誤りは見出されない。上記の美術、歴史の項以外は更に細目が立てられていて、参照したい関係文献には直ちに接することが出来る (pp. 17-18)。

第一分冊に収められたものについて必要な注記は屢々署名入りで示されている。欧米の諸論文については調査が行き届いているので便利である。

今、望蜀の念にかられるまま記するなら、文成公主入蔵の年を六四一年とする(p. 9)のは、第二分冊に収められたP. T. 1288の第一〇行目の記述が六四〇年になるのと一致しない。

P. T. 22 I, II, は prières et hymnes の中に入る。

P. T. 39 はII-IVのみ astrologie に入る。

P. T. 76 は P. T. 127, I, IIと同様のものであり、むしろ、占いの項に示すべきであろう。

P. T. 85 は Langue ——texte rédigé en deux langues chinois et tibétain となっているが、第一部は注で示される (p. 21) とおりチベット字で書かれた梵語呪句であり、夫々の呪句の対象を漢字で示したものと思われるが、決して発音とか対応する意味を漢字で表記したのではないのでこの項目の題名は当らない。第二部も梵語呪句であるからこれも上記項目名に想応しない。

P. T. 113 はどこの分類にも入っていない。II, III, Vは実録的なものの写しであるから histoire に入れるべきであろう。ただし、I, VI, VIIは宗教のうちの仏教の項に入る。

P. T. 116 は、宗教のうちの禅の他に仏教一般のうちに入れられるものがいくつかあり、ここに示されたIIIでは「不住涅槃」を ci la yang mi gnas pa'i mya ngan las 'das と訳し、mya ngan las 'das ba la mi gnas と訳さないから中国仏教の理解にもとづくものであるが、禅文献とのみ云えるものではない。従って、仏教の項にも記入されるべきであろう。IVも同じかと思われる。

P. T. 127 のIは暦占いであり、IIは病に対する灸点と灸の大きさを示したもので科学、技術のうちの医術の項に示すべきである。IIIは暦年名とその占いである。従って、以上を三つに分けて示した方がよい。

P.T. 130 の文中には Khri gtsug lde brtsan の名が示されてはいるが願文であり、史書に類するものではない。その点は P.T. 16 の場合とは異っている。

P.T. 131 には pho brang 'Od srung の名はあるがP.T. 130 と同じく史書には入らない。P.T. 132 には Khri gtsug lde brtsan の名が、P.T. 134 の I には Wu 'i dum brtan 即も、gLang dar ma の名が夫々見えるが、その II と共に P.T. 130 と同じ願文である。例えば、gLang dar ma が破仏の王でなかったことを示す史料にはなろうが、分類は願文の項にのみあればよい。P.T. 175 も P.T. 130 に準ずべきものであろう。

P.T. 230 は Khri 'od srung brtsan の名を与えた単なる願文ではなく、王朝分裂後の統一を示唆する文句を含むので P.T. 16 と同じに扱われて当然である。

P.T. 849 は注に示されるように J. Hackin のテキストと訳があっても、対訳語彙集と後部の間の ll. 116–121 と末尾の l. 187 以後も含めて分けて示し、歴史の項に入れた方がよい。

P.T. 977 は注記はある (p. 24) が、いづれの項からも洩れている。

India Office から求めて加えて貰った方がよいと思われるものが第二分冊に二点ある。一つは P.T. 1288 に加えて F. W. Thomas が紹介した『編手記』Vol. 69, fol. 84 と、P.T. 1075 に加えて同じく Thomas が示した Ch. 88, VI とされるものである。

以上、殊更くわえたような批評と第二巻についての希望を述べたが、第二巻の出版に間に合わないことかと気遣っている。

高価であるが、研究者の座右に置きたいものである。

Mission Paul Pelliot, *Choix de documents tibétains conservés à la Bibliothèque Nationale complété par quelques manuscrits de l'India Office et du British Museum*, présentés par Ariane Macdonald et Yoshiro Imaeda, Tome 1er, publié avec le concours du Centre National de la Recherche Scientifique et du Centre d'Études tibétains du Collège de France, Paris Bibliothèque Nationale 1978.

サドヴァカソフ、ホジャエヴァ、イスハコフ編

ウイグル民族の歴史・文化に関する資料

護　雅夫

一